

6

Ibn Nafis は人体解剖をしたか？

藤倉 一郎

一期会藤倉医院

アラビア医学はギリシャ医学の維持にとどまり、なんら医学に創造的なものはないと考えられていた。アヴィセンナの医学典範も、ラーゼスの医学府庫も、ルネッサンス期の西洋医学復興から16～17世紀の医学の進展に多大の影響を与えたが、これらはギリシャ医学を要領よくまとめたものに過ぎないと考えられていた。

しかしイブン・ナフィスの肺循環の記述が1924年エジプトの医師Tatawyによって、発見されてからアラビア医学の独創性が認められてきた。

イブン・ナフィスがセルベートス、コロンボ、ベサリウスに先行すること300年に肺循環を発見したということは目を見張るものがある。

ヨーロッパでもアラビアでも、当時、人体解剖は宗教的な理由で行われなかった。しかし、ナフィスが肺循環を発見し、心室中隔に通路は無く、なおかつ冠循環を記述していることは、人体解剖なしには考えられない。しかし、ナフィスの論文の発見以来、当時彼が人体解剖をしたのか、しなかったのか議論の多いところである。

この議論のなかで、第一のグループはナフィスは人体解剖はしていないという意見である。Mayerhoff, Shachtをはじめとして、当時の強い宗教的圧迫から人体解剖は行われなかったと考えている。

もともと人体解剖を阻止しようとする考え方は、一般の人々が祖先や死に尊敬の念を持つことから出たと考えられる。解剖を阻止する理由は一般大衆の感情を動揺させることを懸念したのである。Shachtはナフィスの肺循環の発見は賢明な推論から導き出されたものであると説明している。

第二のグループは、Shehada, Kherallaらでナフィスは人体解剖はしていないが、動物の解剖をしているとする。ガレノスとアヴィセンナが象のような大きな動物の心臓には骨があると言っていることに対して、ナフィスは絶対心臓には骨はないと主張しているが、これは彼が動物の解剖をしていることを証明するというのである。

第三のグループは、Oataya, Haddadらでナフィスは人体解剖をしたとしている。

アヴィセンナの解剖に対する注釈の中に、多くの新しい発見が記載されているからである。

脳神経、胆道の走行、視神経の交叉についてなどたくさんの正しい解剖所見がみられる。

そのほかにも骨、筋肉、腸、感覚器など、人体のほとんどすべての部分の解剖所見がこの注釈のなかに記載されている。

「心室間に通路はない、誰かが考えていたような明らかな通路は無いばかりか、厚くてしっかりした組織である。ガレノスが信じていたような、血液の通過する見えない通路もない。」これに対して、ルサン大学医史学教授Leschtantillerの言葉は明確である。彼は次のように述べている。「誰も実際に心臓に指を入れて見ない限り、これほど正確な描写をすることはできないだろう」と。

このようなことからナフィスは実際、人体解剖をしていると思われる。しかし、大衆の感情を動揺させないために秘めていたのではないか。

ナフィスの新しい発見は、肺循環だけが知られ、ほかの発見はあまり知られていない。ナフィス自身アヴィセンナの解剖についての注釈にもかれの見解は簡単にしか述べられておらず、更なる研究や出版が必要であると述べている。

ナフィスはアヴィセンナやラーゼスよりも発見者、革新者としてははるかに優れている可能性がある。